

石川県防災学習プログラム

このプログラムは「能登でのフィールドワークを通じた防災学習」として県教委が企画し、各高校での特色に加え、日程を決め、バスで能登を訪問するツアーです。本校では生徒名、教員名が参加しました。一昨年1月の震災、9月の豪雨災害で大きな災害を受けた能登を訪れ、自然の脅威と災害の現実を見たり、復興への道のりについて聞いたりして、明日起こるかもしれない災害への備えを学ぶ貴重な機会となりました。

日 時	令和8年7月29日(水)
日 程	7:00 学校出発(バス移動) 10:30 見附島・輪島市内 (自然の脅威と現状を知る) 11:30 奥能登芸術祭作品鑑賞・輪島市三井 (復興への取り組み) 12:40 道の駅すずなり・仮説店舗 (復興と防災) 17:00 学校到着

【内容】

(金沢大学名誉教授 塚脇真二先生より バス車内)

能登半島地震 発生日時 2024年1月1日 16:10

珠洲市を震源とする M7.6 の内陸型地震

地震の直前には1日2000回ほど、揺れを計測した。日本では震度7が最大で10段階あるが、海外では12段階ある。今回の地震では約40秒間揺れ続け、揺れとしては非常に長いとされる。阪神淡路大震災は約20秒間だった。断層が長く割れるほど、揺れが大きく、マグニチュードは大きくなる傾向がある。門前では海底が4.1m隆起し、その結果、石川県の面積が増え、北陸3県の中で石川県が2位となるほどであった。



現地ガイドさんよりキリコの解説を聞く本校生徒 (フレッシュライン見附公園にて)

(現地ガイドさんより)

震災以降、能登半島では人口が1万2500人以上、流出している。建物が綺麗に建って見えても、地盤に亀裂が入っている場合もある。奥能登地域では約1/3が全壊、1/3以上が半壊の被害を受けた。高齢化、過疎化も深刻である。布袋寅泰氏と吉川晃司氏(COMPLEX)が復興を支援し、義援金により能登キリコ祭りの栈敷席が設置された。能登キリコは一本の桐から切り出して作るため、非常に高価(1本8000万円)で制作に長い期間(5年以上)を要する。復興は思ったより進んでいないという。関係者からは、「それまで自分たちが生きているかなあ。」と自嘲ぎみの声も聞かれた。



現在の見附島



見附茶屋(現在中止中)

外浦は5.2m隆起し、津波を防いだものの、内浦は沈下し予想以上の津波被害を受けた。津波は見附茶屋まで到達し、現在はブルーシートで覆われ営業を中止している。見附島は珪藻土を主成分として形成されている。珪藻土は保水力に優れ、島の上面には木々が生え、鳥たちの営巣地となっていた。美しい景観として知られる見附島も、現在は島の形が大きく崩れ、「波平さんのようだ。」と形容されるほど、かつての面影を失っている。

珠洲市は昭和29年に市政を開始し、今年で市政72年目となる。最盛期の人口は、約3万8千人。現在は1万2500人程度である。人口減少に歯止めがかからない状況で、交流人口を増やすための施策として「奥能登国際芸術祭」を2017年に開催した。会期中は48作品の展示と5万1千人の来場を記録した。瀬戸内芸術祭(100万人来場)や大地の芸術祭(50万人来場)には、及ばないものの、地域活性に貢献した点は大きいといえよう。また、「迷子のきりん」など一部の作品は、芸術祭終了後も恒久展示され、“過疎からのもがき”としての象徴として現在も鑑賞することができる。震災後は、多くの市民が仮設住宅での生活を余儀なくされているため、以後の実施は見送られてきたが、2029年には新しい形での奥能登芸術祭を開催したいとして計画を立てているとのことである。

(飯田高校・学校長より)

飯田高校は正門から校庭、駐車場にかけて、地震により大きく損壊し、坂が隆起したり、正門や銅像が破壊されたりするなどの大きな被害を受けた。また、これらの姿を見て、受験を取りやめる受験生もいたという。

(現地ガイドさんより バス車内)

児童生徒が3割減少している。珠洲市立正院小学校では運動場に仮設住宅が建てられ、現在の全校児童は10名となっている。

「生かされていることに感謝して生きましょう。」の言葉が印象的だった。

(まとめ)

能登半島地震から約2年半が経ち、人々の記憶から少しずつ震災の記憶が薄れ始めている。多くの人々が自分の生活に追われるなか、その生活すらもままならない人々が、まだ数多くいる。震災の被災者である。震災の情報が新聞やニュースに挙がらなくなっても、決して彼らがこれまで通りの生活に戻ったわけではない。私が実際に足を運んで見た感想は、震災が能登の人々に与えた影響は非常に大きく、深刻だということ。倒壊した建造物、仮設住宅で暮らす住民、破壊された文化財……。復興まで道半ば、様々な困難がある。私たちにできることは、限られているが、実際の現状を知り、思いを共有すること、そして必要があれば、必要な場所に人員や物資を送ることなど、できることはあるはずだ。能登が一日でも早く復興することを心から望む。



研修に参加した生徒たち（見附島）